

受講料
無料

岐阜の魅力から 「地域再生」を考える

9月24日(土) ▶ 25日(日)

両日 13:00~17:00

24日(土)

1. 開講式

黒田 隆志 氏 (前岐阜市歴史博物館長)

2. 講演

社会科教育を中心とする学校教育と歴史博物館との連携がまちおこしに貢献!!

3. 質疑応答

林 正子 教授 (日本近代文学)

清流長良川の文学の魅力 ― 舟橋聖一「白い魔魚」を読む

近藤 真 教授 (憲法学)

憲法から見た岐阜の宝

25日(日)

1. 講演

蒲 勇介 氏 (NPO法人ORGAN理事長、長良川おんぱくプロデューサー)

2. 質疑応答

長良川おんぱく

3. 閉講式

稲生 勝 教授 (科学哲学)

岐阜県の産業遺産

富樫 幸一 教授 (経済地理学)

長良川流域から伊勢湾までの循環型地域をめざして

会場 岐阜大学地域科学部 101講義室

受講対象者 高校生以上の市民一般
(関心のある方なら、どなたでも受講できます。)

募集人数 100名

申込期限 9月9日(金)

申込先 〒501-1193 岐阜市柳戸1番1
岐阜大学地域科学部総務係
TEL: 058-293-3003
FAX: 058-293-3008
E-mail: chiiki@gifu-u.ac.jp

申込方法

受講を希望される方は、
「住所、氏名、年齢、電話番号」を明記の上、
郵送・持参・FAX・E-mailのいずれかの
方法によりお申込みください。

手話などの別途対応が必要な方は、お申し込み時にご相談ください。
ご連絡いただいた皆様の情報は、公開講座の目的に必要な範囲内において使用いたします。ご自身の個人情報の開示・訂正・削除を希望される場合にはご連絡ください。



岐阜大学
JR岐阜駅前、名鉄岐阜駅前から岐阜バス乗車(約30分)



講演内容

9月24日(土)

社会科教育を中心とする学校教育と歴史博物館との連携がまちおこしに貢献!!

黒田隆志(前岐阜市歴史博物館長)

明治6年(1873)、岐阜県庁が笠松から移転してきました。その後、諸官庁が集まり、司町と呼ばれるようになりました。同42年には現在の岐阜県図書館に繋がる岐阜県教育会図書館が開設され、以後、岐阜県の政治と教育文化の中心となりました。

しかし、昭和41年(1966)に県庁が蕨田に移転、県立図書館も岐阜公園を経て現在地に移転。かつての賑わいは消え失せました。

平成27年7月、旧県庁の隣にメディアコスモスが開館。数年後には、南隣に岐阜市庁舎が建設されます。市による司町の復興ともいえます。

この司町は、岐阜駅から続く「賑わいの帯」の最北端に位置し、柳ヶ瀬との距離があり、孤立しているように見えます。しかし、幸いにも中間に市庁舎があり、まもなく跡地利用が検討され始めます。

今回、歴史博物館と学校教育との連携という一見、街の賑わいとは関係のない視点から、跡地の周囲に存在するモノを歴史的・教育的に位置付けし、跡地の具体的利用を提案してみます。

清流長良川の文学の魅力

——舟橋聖一『白い魔魚』を読む

林 正子(日本近代文学)

2015年12月、国連食糧農業機関(FAO)によって、長良川上中流域における伝統漁法、食文化、景観など、岐阜県民の生活に恵みをもたらす「里川」のコンセプトが評価され、「清流長良川の鮎」が世界農業遺産の認定を受けました。人々の生活・精神文化と深い関わりをもつ清流「長良川」が、題名となった舞台となったり、その記述そのものがテーマとなっている小説作品も少なくありません。古来、誕生と奔流と回帰の姿を見せる「川」の生態が、人間一生のドラマに重ねられることによって作家の創造力をかきたて、さまざまな邂逅と別離の人間模様と波乱の人生ドラマが生み出されてきました。今回の講座では、『花の生涯』(1953)や『新・忠臣蔵』(1961)で知られる舟橋聖一(1904~1976)の長編小説『白い魔魚』(1956)を主な対象として、清流長良川の文学の魅力、山紫水明の岐阜の風土の魅力について論じ、清流長良川の文学に親しむことによる「地域再生」の可能性を模索します。

憲法から見た岐阜の宝

近藤 真(憲法学)

憲法(平和、環境、地方自治)から見た岐阜の宝を3つ挙げよと言われれば、劇団はぐるま、恵那の教育、岐阜大学地域科学部と答えるでしょう。まず、「都市には劇場が必要である」(宮本憲一)。劇団はぐるまは、真宗の僧侶にして天才的な劇作家こばやしひろしによって創設された全国屈指の地方劇団です。子ども向けファミリー劇場と大人向けの問題提起的演劇の60年間の舞台から、良心的な文化の息吹を吸ったのべ50万人の子どもたちが巣立ちました。次に、「恵那には汲めども尽きぬ教訓がある」(山本堯)。恵那の教育とは、戦前・戦後を通じた生活綴り方教育を中心に地域に根づく自由教育の100年の伝統であり、そこから全国に勇名をはせた教育等の県下の指導者が無数に育ちました。最後に「Think globally, Act locally.」(ローマクラブ)。岐阜大学地域科学部はglocalな文理融合の新設学部ですが、20年間で卒業生の3割を県や地方行政に送り出しました。彼らが現場と大学を結べば、地域問題解決の法政策的立案が可能になり、地域近代化の未来が切り開かれるでしょう。

9月25日(日)

「長良川おんぱく」

蒲勇介(NPO法人ORGAN理事長・長良川おんぱくプロデューサー)

全国の観光温泉地で始められた「温泉博覧会」を岐阜でもと、2010年からスタートした「長良川おんぱく」は今や全国でも最大の規模まで発展しています。長良川や金華山、鶯飼、そして長良川温泉といった既存の資源だけでなく、地域の新たな魅力を発掘する食やまち歩き、健康、自然体験、アートなどで、2015年には180もの体験型プログラムを9~11月に集中的に開催しています。郡上から河口の桑名までの流域を繋ぎ、数多くの市民グループや企業、NPOなどが実施するパートナーとなって魅力的なプログラムを提供し、参加者からは最高の満足度という評価を得ています。今年から上中流の4市が一体となった日本版DMO(着地型観光)として、年間を通じた商品の販売プログラムの開発などを目指します。誰でも楽しく参加できるだけでなく、自ら企画したいプログラムづくりを、地域のみんなの力で実現していくまちづくりのプラットフォームとなっていることを紹介します。

岐阜県の産業遺産

稲生 勝(科学哲学)

産業遺産は、今、世界遺産としても注目されるようになり、聞いたことがある人も多いと思います。日本では、産業遺産関連では、石見銀山、富岡製糸場、八幡製鉄所などの明治期の産業革命遺産が世界遺産に指定されています。

産業遺産とは、産業革命遺産という言い方もありますが、産業革命の歴史を刻みながら残存する遺跡であり、その研究を産業考古学といいます。産業革命は、技術史的にみれば、道具から機械への転換であり、大量生産による資本主義の確立過程のことで、それを示す遺跡が産業遺産です。

そして、岐阜県は産業遺産の宝庫でもあります。揖斐川の現在のJR東海の鉄橋のすぐ横にかかっている元の東海道線の鉄橋は現存する日本最古の鉄橋で国の重要文化財に指定されています。また、長良川鉄道北濃駅には蒸気機関車の向きを変える転車台(ターンテーブル)が登録文化財となっています。こうした岐阜県の産業遺産を保存動向も含め、紹介したいと思います。

長良川流域から伊勢湾までの循環型地域をめざして

富樫幸一(経済地理学)

木曾三川ではこれまでの開発によってダムや堰で川の流れは断ち切れ、生態系にも大きな影響を与えてきました。また、伊勢湾でも臨海工業地帯によって人工の海岸線が伸び、残された自然の干潟や海岸線を保全する取り組みが行われています。

国や自治体の行政も、河川や地下水と、港や海では縦割りとなっていて、相互の連携がうまくとれていないといえないうでしょう。しかし、21世紀の環境の時代では、名古屋で開かれた2010年の生物多様性COP10で定められた「愛知ターゲット」のように、失われた自然の回復を目指して、住民や企業、NPO、行政が協働して取り組んで行かなければなりません。

降水量や河川流量からみた水収支や、利水のあり方といった健全な水循環にとってのベーシックな理解から、水資源の開発と保全、中山間地域から平野部、都市部、さらには湾の内海までをつなぐ流域の住民の手による環境保全の活動を紹介して、川から海までを一体のものとして一緒に考えてみましょう。